

## 50 最古参学校医 船石保太

小田 皓 二

日本で学校医制度が始まった当初から校医となり、六年後に八〇歳で退任し、最高齢の校医といわれた船石保太を紹介する。

船石は一八六五年（慶応一）、現在の広島県深安郡神辺町で生まれ、日本における学制の揺籃期に育った。地の小学校から隣接する岡山県井原市の興讓館で学び、一八八一年（明治一四）に岡山県医学校に入學、八六年（明治一九）に卒業した。

医学校は七〇年（明治三）に岡山藩医学校として始まり、八〇年に岡山県医学校と改称された。東大以外で卒業後に無試験で医術開業免許が与えられた最初の医学校で、八八年（明治二二）に第三高等中学校医学部となった。在学中に明治天皇が全国で初めて医学校に行幸され、跡地に巨大な臨幸記念碑が建てられている。

定員百人、修学年限四年で、八四〜八八年の五年間の卒業生は五〇人に過ぎず、入学できても卒業はきわめて難しかった。岡大医学部にある唯一の県医学校の卒業証書と卒業成績証書は船石のものである。

卒業後に上京し、西洋医学の普及を目指して東京医事新報社に勤務し、同県人の富士川游と交友があったという。船石は井原の医師の娘と結婚したために井原で開業した。近代医学教育を受けた地方では初めての医師で、熱心でつねに研修に努力し、非常にはやった医師で、長年にわたって医師会の役員、会長を勤めていた。

明治中期に予防医学、衛生、裁判医学などの知識レベルの向上のために、東大に国家医学講習科（四カ月）が開設された。船石は九三年（明治二六）に第九回講習会を受講し、その詳細な報告が本学会誌（四四巻三号）に掲載されている。

一八九八年（明治三二）に学校医制度が勅令として公布され、世界で初めての制度として全国の公立学校に校医をおくことが定められた。当初は人口五千人以下の町村は、特別な事情があれば当然の間は校医設置を免除さ

れていた。校医の任命権は市町村ではなく県にあり、漢方医を排除して西洋医に限定したため有資格者が少なく、校医設置は遅々として進まなかった。船石は九九年(明治三三)に高等小学校、町と隣村の尋常高等小学校、次いで高等女学校の校医となり、さらに郡の学校衛生学会長として学校保健に尽力した。

一九二二年(大正二)に長男が京大を卒業し、その翌年には京大講習科(四週間)でも産婦人科、耳鼻咽喉科の卒後教育を受けている。

終戦前の一九四四年(昭和一九)に八〇歳を迎えて四六年間の校医を退いた。引退に当たって町議会は感謝決議を行い、町と国民学校は頌徳式を開いて、日本一の校医であるとともに多年にわたる地域医療への貢献を讃えている。五九年(昭和三四)に九四歳で亡くなったとき市の男性最高齢者であった。

長男と三男は京大出身の眼科医で、長男は秋田日赤から南満医学堂教授を経てドイツへ留学し、のちに満州医大教授、病院長を勤めた。次男は東大を出て鉄道省鉄道監となり、三男はハルピン医大教授となり戦後は郷里で

開業した。五人の女子は女専、女高師、女子大に進学した稀に見る教育一家であった。

〈一竿〉と号して漢詩に親しみ今でも地域に多くの書が残っている。没後に詩集『一竿詩鈔』が編纂され、岡山の最も古い先輩であり、長男と三男が京大出身の縁故によって、京大同窓でときの岡大大学長であった八木富士雄が題字を書いている。

最古参で、しかも最高齢の校医といわれた船石保太を紹介する。

(おだうじ会小田病院)